Afterword
編集後記

「ウクライナの3劇場ディレクターインタビュー：レーシャ・ウクラインカ劇場」から ▶P.106

プーチンのロシアが戦争を始めてから一年が経つ。ウクライナでの戦争を機に各国は軍備増強に舵を切った。昨年（2022年）は世界の政治指導者たちが戦争体制へ政策を転換した年として、歴史に記憶されるのだろうか。

新型コロナとの闘いで疲弊していた生活を戦争が襲った。文字通りダブルパンチだった。幸いなことに、パンデミックは徐々に収束の兆しを見せている。しかし、未知の感染症の流行と戦争が私たちに与えた衝撃の大きさは測りがたい。

覇権をめぐる大国間の争い、資本主義の限界、環境破壊、貧富の格差、ジェンダー不平等、移民・難民の受け入れ、社会の分断、ハラスメント、原発回帰など、国内外を問わず人類の矛盾が一気に噴き出したと言っても大袈裟ではないほどの一年だった。そこへ安全保障に対する危機感が加わった。一年前には想像もできなかった事態である。

今、私たちは転換期にいる。こうした不安定な時期に、あらためて文化活動の意義を考える手がかりを作りたい。編集部一同はそのように考えて本年鑑を作成した。ここに集められた寄稿やインタビューをきっかけに、演劇を通して世界を知り、文化の価値を実感する人が一人でも増えて欲しい。そう私たちは願っている。

今回の「シアター・トピックス2022」について簡単に紹介しよう。

本年（2023年）は『国際演劇年鑑』の創刊50周年に当たっている。そこで、国際演劇協会（ＩＴＩ）日本センター常務理事・事務局長の曽田修司氏に、日本センター草創期を振り返っていただいた。第二次世界大戦後の日本演劇の海外交流の事情が詳しく描かれている。ユネスコの演劇舞踊分野で活動を続けてきたＩＴＩと日本センターが日本の伝統演劇、現代演劇、前衛演劇を世界に橋渡しした役割の大きさが確認できよう。

「ウクライナの3劇場ディレクターインタビュー：ルハンスク劇場」から　▶P.114

「ウクライナの3劇場ディレクターインタビュー：イヴァン・フランコ劇場」から　▶P.120

「戦時下で舞台をつくるということ:ウクライナの３劇場ディレクターインタビュー」にはウクライナの演劇人の声が集められている。公演を継続しているキーウ市のレーシャ・ウクラインカ国立アカデミック劇場、前線に近い東部のルハンスク州立アカデミック・ウクライナ劇場、そして西部のイヴァノ=フランキウスク・イヴァン・フランコ国立アカデミック劇場で活動を続ける演劇人の、砲撃と隣り合わせの緊迫した日々が、活字を通して見えてくる。

ロシア人演出家ティモフェイ・クリャービンのインタビューも読んで欲しい。2019年10月に東京芸術劇場に招聘され、私たちに鮮烈な印象を残した、手話による『三人姉妹』の演出家である。彼は今ロシアを去り、欧州で活躍している。

2022年は沖縄本土復帰50年の節目の年でもあった。俳優の瀬名波孝子氏と国立劇場おきなわ芸術監督の金城真次氏の対談を中心に、論考とコラムを合わせ、「沖縄芝居」の特集を組んだ。本土には、地元の感情を無視して与那国島にミサイル部隊を配備し、日米共同訓練さえも実施する日本政府の姿勢を支持する向きもあるが、いかがなものか。1979年に文芸坐ル・ピリエで観たレクラム舎の『人類館』（作：知念正真（ちねんせいしん）、1976年演劇集団「創造」初演）の衝撃が忘れられない私は、国家目線の安全保障の論理を内面化して軍備増強に賛同する論調に違和感をぬぐえない。

特集「紛争地域から生まれた演劇14」は、2022年12月に東京・高田馬場のプロトシアターで行われる予定だったリーディング公演『Bad Roads』についての報告である。作家はウクライナのナタリア・ブロズビト。残念ながら感染症対策のため公演は中止となったが、演出の生田みゆき氏に作品の意義を論じていただいた。

「ティモフェイ・クリャービン インタビュー」から ▶P.132

「激動の沖縄の歴史映す『沖縄芝居』」から ▶P.135

海外の演劇事情を紹介する「世界の舞台芸術を知る2021/2022」は、毎年掲載している中国、韓国、アメリカ、イギリス、ドイツ、フランス、ロシアの報告に加えて、スペイン、イタリア、フィンランド、リトアニアについても貴重な報告を寄稿していただいた。なかでも、ソ連時代の過去と決別し、独自の表現を打ち立てようとするリトアニア演劇事情の報告は興味深い。

多くの国々の演劇事情報告から聞こえてくるのは、コロナ禍からの回復が鈍いという切実な声である。観客動員数がコロナ以前に戻らないというのだ。たとえば「ドイツ」の報告者エーファ・ベーレントによると、「2019年まで比較的安定して年間330万人の入場者を確保」してきたドイツの劇場は、「ベルリンの壁崩壊以来、もしかすると最悪の観客減を経験している」という。もちろんその原因は、コロナ禍による生活習慣の変化やウクライナ戦争で上昇したインフレ率とエネルギー危機に他ならないが、同時に彼女は、今劇場は構造的・芸術的な再編成の過程にあると指摘する。

劇場は差別に対して敏感で、ジェンダーの点で公正で、家族に優しい労働環境になるべきだとベーレントは言う。ハラスメントの土壌ともなってきた、男性が指導的立場の多数派であった時代のヒエラルキーを排し、多様な人材が職種を越えて対等な賃金体系で働ける環境が必要だという彼女の意見は傾聴に値しよう。

「日本の舞台芸術を知る2022」には、「能・狂言」「歌舞伎」「文楽」「ミュージカル」「現代演劇」「児童青少年演劇」「日本舞踊」「バレエ」「コンテンポラリーダンス・舞踊」「テレビドラマ」の回顧を寄稿していただいた。いずれも定点観測的な意味もあり、過去の寄稿と読み比べることで、各ジャンルの年ごとの特徴が読み取れる。

「リトアニア：ディストピアの時代」から　▶P.090

「ドイツ：過酷な時代を反映し、解決策を探る演劇」から
▶P.052

透明度の高い制作体制を求める切実な声は日本でも上がっている。残念なことに、昨年も演劇界ではハラスメントの問題が数多く俎上に載った。当然のことながら、ハラスメントは許容されるべきではない。多くの俳優、スタッフの献身的な努力の成果が純粋な目で見られなくなってしまうとは、なんと悲しいことではないか。

国際演劇協会（ITI）日本センターでは、昨年10月、ハラスメント防止のためのガイドラインを策定した。『国際演劇年鑑』編集部も、いかなるハラスメント行為も許容せず、演劇界のハラスメント問題について真摯に向き合っていくことを明記する。

2023年 3 月17日

『国際演劇年鑑』編集長 新野守広

にいの・もりひろ

1958年生まれ。立教大学教授。専攻は現代ドイツ演劇。著書に『演劇都市ベルリン』（れんが書房新社・2005）、共著に『「轟音の残響」から―震災・原発と演劇―』（晩成書房・2016）、訳書にファルク・リヒター著『崩れたバランス／氷の下』（共訳、論創社・2009）、デーア・ローアー著『無実／最後の炎』（共訳、論創社・2010）、ヨアヒム・ガウク著『ガウク自伝』（論創社・2017）などがある。

「紛争地域から生まれた演劇」シリーズの展開

Theatre Born in Conflict Zones

国際演劇協会日本センター主催の「紛争地域から生まれた演劇」シリーズでは、
14年にわたり33の戯曲を紹介し、2011年からは戯曲集を発行しています。
2018年には、彩の国さいたま芸術劇場のさいたまネクスト・シアターによる新プロジェクト
「世界最前線の演劇」の第一弾として、当センターが初翻訳・リーディング上演した
『ジハード』（翻訳＝田ノ口誠悟）が日本初演され、翌年には
『朝のライラック』（翻訳＝渡辺真帆）が同プロジェクト第三弾として上演されています。
この2作品はまた、小田島雄志・翻訳戯曲賞を受賞しています。
さらに、10周年を迎えた2019年8月には、
各国の劇作家をはじめ当シリーズに携わった演劇人たちによる
書き下ろし原稿によって、この試みの意義を問い直す書籍
『紛争地域から生まれた演劇』がひつじ書房より出版されました。

10年にわたる「紛争×演劇」の試みが、
混迷する現代社会に生きる私たちに語りかけるものとは――。

『紛争地域から生まれた演劇』

国際演劇協会日本センター 編　林英樹・曽田修司 責任編集
定価3,600円＋税

シリア、パレスチナ、イランなど世界の「紛争地域」で、なぜ演劇は創られ、どのように演じられているのか。本書により、私たちは未知の紛争について知り、それが自分たちと直接関わりのある出来事であることを発見し驚愕する。欧米、アフリカ、そしてアジアの各地で。本書は、世界の歴史・文化・宗教・政治が、語り手・演じ手・観客という個人の視点を介して交錯し共鳴する、圧巻の「現代・世界・演劇」探究の書である。

ひつじ書房

ITI Centres

世界の国際演劇協会センター（2023年3月27日現在）

アメリカ

アメリカ合衆国
キューバ
コロンビア
ベネズエラ
メキシコ

アフリカ

アルジェリア
ウガンダ
エジプト
ガーナ
ギニア
コートジボワール
コンゴ共和国（ブラザビル）
シエラレオネ
ジンバブエ
スーダン
チャド
中央アフリカ共和国
トーゴ
ナイジェリア
ニジェール
ブルキナファソ
ベナン
マダガスカル
マリ
モロッコ
モーリタニア

ヨーロッパ

アイスランド
アゼルバイジャン
アルメニア
イギリス
イタリア
エストニア
オーストリア
オランダ
北マケドニア
キプロス
ギリシャ
クロアチア
ジョージア
スイス
スウェーデン
スペイン
スロバキア
スロベニア
チェコ
ドイツ
ハンガリー
フィンランド
フランス
ベルギー（フランドル）
ベルギー（ワロン）
モナコ
モンテネグロ
ラトビア
ルーマニア
ルクセンブルク
ロシア

アジア太平洋

イスラエル
イラン
インド
韓国
スリランカ
中国
日本
バングラデシュ
フィリピン
ベトナム
モンゴル

アラブ

アラブ首長国連邦（フジャイラ）
イエメン
イラク
オマーン
クウェート
シリア
バーレーン
パレスチナ
ヨルダン

世界のITIセンターのリストは、本部のウェブサイトで随時アップデートされています。

International Theatre Institute ITI / Institut International du Théâtre ITI
Office at UNESCO UNESCO, 1 rue Miollis, 75732 Paris Cedex 15, France
Headquarters in Shanghai 1332 Xinzha Road, Jing'an, Shanghai 200040, China Tel: +86 (0)21 6236 7033
info@iti-worldwide.org / www.iti-worldwide.org

ようこそ
帝国劇場へ

舞台から客席へ、客席から舞台へ…
帝劇は心と心のかよう場所です。
どうぞ、素敵な思い出をお持ち帰りください。

東宝 TOHO 帝国劇場 IMPERIAL THEATRE

https://teigeki.tohostage.com
@toho_stage

TAKARAZUKA REVUE

Hankyu Corporation

宝塚大劇場

阪急宝塚駅下車（水曜定休）
※2023年4月22日より月曜定休。

Hankyu Corporation

東京宝塚劇場

有楽町・日比谷駅下車（月曜定休）

お問い合わせ

Tel.0570-00-5100

（10:00～18:00）
※一部の携帯電話・IP電話等からはご利用いただけません。

宝塚歌劇公式ホームページ

https://kageki.hankyu.co.jp/

夢と感動のステージへ…

宝塚友の会がご案内します！

一般前売に先立ち最も早くチケットをお買い求めいただけます。
入会申込書のご請求・お問い合わせは

Tel.0570-00-8739

（10:00～17:00／水曜定休）
※2023年4月22日より月曜定休。
※一部の携帯電話・IP電話等からはご利用いただけません。

東京芸術祭
Tokyo Festival

東京芸術祭

東京の多彩で奥深い芸術文化を通して世界とつながることを目指し、毎年秋に東京・池袋エリアを中心に開催している都市型総合芸術祭です。東京の芸術文化の魅力を分かり易く見せると同時に東京における芸術文化の創造力を高めることを目指しています。中長期的には社会課題の解決や人づくり、都市づくり、そしてグローバル化への対応を視野にいれて取り組んでいます。

Tokyo Festival

This is a comprehensive urban arts festival held every fall around Tokyo's Ikebukuro area which aims to connect with the world through Tokyo's rich and diverse arts and culture scene. While showcasing the appeal of Tokyo's arts and culture in an easy-to-understand manner, at the same time the festival aims to enhance Tokyo's own creative capabilities. In the mid-to-long term, we will continue to work on resolving social issues, developing human resources, developing urban areas, and tackling globalization.

https://tokyo-festival.jp

Facebook *https://www.facebook.com/tokyofestivalsince2016/*
Twitter *https://twitter.com/tokyo_festival*
Instagram *https://www.instagram.com/tokyo_festival/*

主催：東京芸術祭実行委員会
［豊島区、公益財団法人としま未来文化財団、公益財団法人東京都歴史文化財団（東京芸術劇場・アーツカウンシル東京）、東京都］

Tokyo Festival Executive Committee
[Toshima City, Toshima Mirai Cultural Foundation, Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture (Tokyo Metropolitan Theatre & Arts Council Tokyo), Tokyo Metropolitan Government]

YPAM

Yokohama
International
Performing Arts
Meeting

2023.12.1–17

ypam.jp

A REAL THEATER OF THE PEOPLE BY THE PEOPLE FOR THE PEOPLE in TOKYO:

TOMIN GEKIJO

WHAT MAKES UP A THEATER?

Playhouses, performers and the audience. But what is indispensable? TOMIN GEKIJO thinks that people are.

TOMIN GEKIJO has no playhouse or troupe of actors, but does possess a permanent audience, the number of its members amounting to about 10 thousand today.

EACH HAS HIS OWN TASTE

TOMIN GEKIJO organizes 3 series: ENGEKI, KABUKI and SHINGEKI. Their programs are selected by project committees composed of well known specialists and representatives among the members. Particularly in the theater series, members can chose among about 60 different plays a year according to their own tastes.

TOO EXPENSIVE OR NOT, THAT IS THE QUESTION

Once having paid membership fee, which costs 1000 Yen for an individual member, members can enjoy many programs with season tickets discounted 20 or 30%

HEAVEN CREATES A MAN NEITHER ABOVE NOR UNDER A MAN

said an ancient opinion leader Yukichi FUKUZAWA. TOMIN GEKIJO has succeeded in keeping this principal by establishing an audience system which consists in distributing booked seats by a rotation system.

WHAT DOES TOMIN GEKIJO MEAN?

TOMIN means a citizen of Tokyo and GEKIJO a theater. Under the generous support of the Tokyo Government and the Japan Theater Promoters Guild, it also makes possible "Theater going at half-price" for Tokyoites.

TOMIN GEKIJO, a new audience organization, aims at an open theater and actively seeks contacts with foreign theaters.

TOMIN GEKIJO: 5-1-7 Ginza Chuo-ku Tokyo 104-8077 Japan Phone : 03-3572-4311

国立劇場では、歌舞伎、文楽、舞踊、邦楽、
能楽、雅楽、琉球芸能、民俗芸能、大衆芸能など
さまざまな伝統芸能を上演しています。

国立劇場

大劇場　小劇場　演芸場　伝統芸能情報館

〒102-8656 東京都千代田区隼町４ー1

地下鉄「半蔵門駅」「永田町駅」下車

https://www.ntj.jac.go.jp/　**03-3265-7411**(代表)

国立劇場チケット センター 0570-07-9900

国立能楽堂

〒151-0051 渋谷区千駄ヶ谷4-18-1

電話 03-3423-1331(代表)

ＪＲ「千駄ヶ谷駅」下車
都営地下鉄「国立競技場駅」下車

国立文楽劇場

〒542-0073 大阪市中央区
日本橋1-12-10

電話 06-6212-2531(代表)

地下鉄 近鉄「日本橋駅」下車

国立劇場おきなわ

〒901-2122 沖縄県浦添市
勢理客4-14-1

電話 098-871-3311(代表)

伝統が今日に生き明日につながる松竹演劇

歌　舞　伎　座
東京都中央区銀座4-12-15
03-3545-6800

新　橋　演　舞　場
東京都中央区銀座6-18-2
03-3541-2600

サンシャイン劇場
東京都豊島区東池袋3-1-4
03-3987-5281

大阪　松　竹　座
大阪市中央区道頓堀1-9-19
06-6214-2211

京都　南　座
京都市東山区四条大橋東詰
075-561-1155

松竹株式会社
演劇本部
東京都中央区築地四丁目一番一号
電話(五五五〇)一五七三(歌舞伎製作部)

公益社団法人 国際演劇協会日本センター 役員

会長	永井 多恵子
副会長	安孫子 正
	吉岩 正晴
常務理事	曽田 修司
理事	安宅 りさ子
	伊藤 洋
	大笹 吉雄
	小田切 洋子
	糟谷 治男
	木田 幸紀
	坂手 洋二
	真藤 美一
	中山 夏織
	野村 萬斎
	林 英樹
	坂東 玉三郎
	菱沼 彬晁
	松田 和彦
	三輪 えり花
	和崎 信哉
監事	岸 正人
	小林 弘文
顧問	大谷 信義
	河村 潤子
	迫本 淳一
	田之倉 稔
	野村 萬
	波多野 敬雄
	堀 威夫
	松岡 功

（2023年3月27日現在）

文化庁委託事業
令和4年度 次代の文化を創造する新進芸術家育成事業

編集長	新野守広
事業担当理事	曽田修司
編集	垣花理恵子、後藤絢子、小西道子（オフィス宮崎）、多田茂史、中島香菜
編集スタッフ	綾田將一、壱岐照美、櫻井拓見、中山夏織、村上理恵、山田真里亜、横堀応彦
翻訳	〈日本語版〉 田村容子（中国語）、石川樹里（韓国語）、萩原健（ドイツ語）、並河咲耶（イタリア語）、石川麻衣、後藤絢子、中森拓也（以上、英語） 〈英語版〉 アラン・カミングス、石川麻衣、ヴァレリー・フレイジャー（オフィス宮崎）、エレナ・ゴールドスミス（オフィス宮崎）、角田美知代、ドナカ・クロウリー、トニー・ゴンザレス（オフィス宮崎）、マーク・大島、マット・トライヴォー（オフィス宮崎）、リチャード・エマート
校正・校閲	〈日本語版〉 アンドレイ・ナスチューク、垣花理恵子、後藤絢子、白石実都子（オフィス宮崎）、多田茂史、中島香菜、中森拓也 〈英語版〉 アンドレイ・ナスチューク、大内淳子、荻野哲矢、小西道子、サイモン・シドオ、白石実都子、マシュー・ホーン、平野都子（以上、オフィス宮崎）、多田茂史 〈戯曲集〉 安宅りさ子、アンドレイ・ナスチューク
協力	ウクライナ作家連盟、牛田さとみ、木村文、日本リトアニア友好協会、藤盛愛加
装幀・本文デザイン	久保さおり
製　版	山浦印刷（株）
印　刷	（株）三協社
製　本	（株）ウィンカム

国際演劇年鑑2023　世界の舞台芸術を知る
Theatre Yearbook 2023　Theatre Abroad

発行日　2023年3月27日
発行者　公益社団法人 国際演劇協会日本センター
〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-18-1 国立能楽堂内
Tel：03-3478-2189　Fax：03-3478-7218
mail@iti-j.org　http://iti-japan.or.jp

本年鑑は、公益社団法人国際演劇協会日本センターが文化庁の委託事業として実施した、令和4年度「次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」の成果をとりまとめたものです。本年鑑の複製、転載、引用等の際は、発行者までご連絡ください。
落丁・乱丁本はお取り替えいたします。
© Japanese Centre of International Theatre Institute 2023
Printed in Japan

Japanese Centre
of
International Theatre Institute